

光る坊主めぐり

【登場人物】

少年

男

母親

担任

※本編はすべて少年の一人称視点（POV）で進行する。

INT.漆黒の闇

何も見えない。

男の低く、愉悦を孕んだ声が聞こえる。

男の声

「さあ。ゲーム開始だ」

INT.室内-暗闇

真暗闇の中、小さな光がぽつんと灯る。

その光源は、テーブルの上に置かれた一枚の「百人一首」の札だ。

そこには裏返しになった山札と、男によってめくられたばかりの「一枚の札」

がある。

めくられた札に描かれた「坊主」の「はげ頭」が蝋燭のように淡く発光してい

る。

その光に照らされ、少年の対面に座る男（端正な顔立ち）の顔がぼんやりと浮

かび上がる。

男

「さあ。次はお前の番だ。それとも、もう降参か？」

しばしの沈黙。

少年（カメラ）の震える手が伸び、ゆっくりと山札をめくる。

めくられた札は――「坊主」。

坊主のはげ頭から光が放たれる。

さきほどよりも光は強く、正面の男の顔が鮮明に露わになる。

男は余裕の笑みを浮かべる。

男

「三枚目、いくぞ」

すぐさま次の札をめくる。

再び「坊主」。

坊主のはげ頭から光が放たれる。

室内の光量はさらに強まり、まるで真昼のような明るさに達する。

男は蔑むような視線で、少年を舐めるように見つめる。

男

「これで完全に晒された。…おいおい、ひでえツラだ。生気のない肌、おどおどした目付き。そんな情けないビジュアルで、よく毎日生きられるな」

男は鼻で笑い、冷酷に言い放つ。

男

「鏡を見るたび死にたくならないか？ お前みたいな『日陰者』に光は似合わない。早いとこ逃げちまえよ、お似合いの暗闇の中に…さあ。カウントダウンだ。5、4、3、2、1…」

ゼロになる直前、少年の手がテーブルへと伸びる。

山札をめくられる。

「坊主」。

坊主のはげ頭から閃光が走り、男が一瞬、眩しさに顔をしかめる。

男

「めくったか。…当然、俺もめくるがな」

男が札をめくる。

「坊主」。

坊主のはげ頭からもはや直視できないほどの光が溢れ出す。

男は目を顰めながらも、挑発するように言葉を吐き続ける。

男

「…ここから先は、お前のすべてが暴かれる。出生、学歴、交友関係…惨めな

人生がまるごと白日の下に晒される。お前が童貞だってこともだ」

沈黙。

男

「もう降りろ。お前にはめくれない」

少年のまぶたが閉じられる。

少年の視界から男の姿が消え、声だけが響く。

男の声

「そう…それでいい。しょせんお前は日陰でしか生きられない人間。俺とは生きる世界が違うんだ。一生、光を恐れ続けて――」

INT.少年の部屋-回想

男の声に、別の声が重なる。

母の声

「あんたはいつもそう！ そうやってすぐにウジ虫みたいに自分の殻の中に逃げて！ ねえ、聞いているの！」

少年、目を開ける。

少年の目の前には、自分を怒鳴りつける母親の姿。

母

「いつまで閉じこもっているつもりなの!？」

INT.少年の部屋-別の日

少年の前に学校の担任教師の姿。

担任、優しく微笑む。

担任

「体調はどう？」

担任、カバンを漁り、Tシャツを取り出すし、少年に渡す。

クールなデザインが施されている。

担任

「文化祭のTシャツ。君が考えたデザイン、みんな褒めてたよ」

担任、主人公の顔を見据える。

静かに問いかける。

担任

「ねえ。君が本当に恐れているものは何？」

沈黙。

担任

「君は何を恐れているんだ？」

INT.少年の家-居間

母親、電話で夫へヒステリックに金切り声をあげている。

母親

「仕事仕事って！ あんたも家のことしなさいよ！　なんで私ばかり！」

主人公の声（モノローグ）

「僕が恐れているものは…」

INT.少年の家-居間-別の日-夜

沈み込み、ひとり缶ビールを飲む母親の背中。

主人公の声（モノローグ）

「僕が恐れているものは…」

INT.少年の部屋

担任、少年を見つめている。

担任

「君が本当に恐れているもの。それは、君自身が眩しすぎること」

沈黙。

担任

「君の放つ光が、お母さんを苦しめてしまうこと——」

INT.漆黒の闇

再びまぶたが閉じられる。

闇の中に声が響く。

主人公の声（モノローグ）

「僕が恐れているものは…僕自身の…光…」

INT.室内-回想終わり

少年、じっとまぶたを閉じている。

少年の声

「めくれ、めくれ、めくれ、めくれ…っ！」

少年、カッと目を見開く。

少年の手が、猛然と札へ伸びる。

山札を叩きつけるようにめくる。

少年の声

「めくれえええええええ—————！！」

坊主がめくられる。

画面全体が、爆発的な純白の光で埋め尽くされる。

男、眩しさで目を覆う。

男の絶叫

「目があ！ 目がああああああ—————！！」

男が錯乱し、テーブルの札をめちゃくちゃに散らす。

札が地面に落ち、光が裏返り——

そして、暗闇の静寂が訪れる。

INT.少年の部屋-朝

少年、ハッと目を開く。

そこは、いつもの見慣れた自室。

少年、ゆっくりと身体を起こし、カーテンで締め切られた窓へ向かう。

少年、カーテンに手をかける。

一気に、そのカーテンを開く。

窓から太陽の光が室内に差し込み、主人公を包み込んで——

(完)